

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂
編集発行人 村上 徳 存
電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127

毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞 應 寺
印刷所 東田印刷株式会社

通元老師を偲んで(二)

大本山永平寺副監院
栃木県明林寺住職

西 田 正 法

大本山永平寺贈西堂瑞應
三十世重中興大慈通元大和
尚様の御本葬お逮夜に因み、
御老師の御徳を偲びつつ、
暫くお時間を頂戴し、お話を
させて頂きます。

檀崎通元御老師とのご縁を
頂いた数多くの修行僧の中
で、何故私がお話申し上げる
ことになったかと言います
と、通元老師が在世中に私は
全国あちこちで御老師のお話を
しておりまして、御老師も
その事を風の噂にお聞きで、
お目に掛かった際に、「まあ
えー、大いにやったらええ」と
仰って下さっております。

そのような事情から村上
堂長老師や遺弟の金岡老師
が、この機会に通元老師と本
人のご真前で話をさせてやろ
うとの慈悲心を回らして下
さったものと理解しております。
私は、瑞應寺僧堂で修行
させて頂いた仲間との話か
ら、どうも御老師に叱られた
数において人後に落ちないよ
うなのです。その私の法話は、
老師からお叱りを受けた内
容を事細かに思い出しなが
ら、叱られた儘にお話してい
るだけなのです。しかし、
そのお叱りの内容が深いもの
ですから、大勢の方々に「良

いお話を聞かせて頂きまし
た」と、喜ばれたり、感謝さ
れたりしております。今、私
がこの場にこうして居ります
事が通元老師様からのお導き
に思えてなりません。数えき
れぬ程の教えを頂き、心から
感謝しております。今夜は、
通元老師様に報恩の誠を捧
げる思いで勤めさせて頂きた
く思います。どうぞ、しばし
お耳をお貸し下さいますよう
お願い申し上げます。

最初から大変恐縮なので
すが、御老師が遺された遺
偈について触れさせて頂き
たい。御老師の境涯の足下
に及ばぬ者がその遺偈につ
いて語る事など許されるも
のではないのですが、御老
師からお叱りを受けつつ厳
しくご指導頂いた立場で読
ませて頂きたいのです。で
すから、全く私なりの解釈
であります。「西田でない
とそうは解釈しないだろう」と
いう解釈になります事をお
許し下さい。

「胡説乱道 九十七年」胡
説とは「でたらめ、道理が通
らない」との意味ですから、
御老師が一代なさって来られ
た四衆への説法接化を謙遜
なさって「でたらめを説いて
道を乱して来た九十七年で
あった」と、仰っておられる
のですが、通元老師の行者
としての配役を頂いてから
の私にとって、老師のお叱り
は正に「胡説乱道」だったの
です。と申しますのは、私
は中学を卒業すると夜間高
校へ進み、生まれ育った寺の
田圃三反八畝を一人で耕作
し、農繁期には日雇いで近
隣の農家の手伝いを、農閑
期には街の家具屋さんで働
いておりました。世間を知
らない十代なかばの小僧が
社会で生きて行くには、素
直さ謙虚さ、そして陰日向
の無い真面目さに限ります。

言うならば、私は早くから
世間に出て「素直・謙虚・真
面目」を処世術として身に付
けて生きてきたのです。そ
して、この処世術は、学生
時代の部活動でも、大学三
年からお世話になった東京
のお寺でも、何処に身を置
いても私自身が生きてゆく
のに有効な処世術でした。

ところが、この処世術を
処世術と見抜かれ間髪入れ
ずに叱り飛ばされたのが通
元老師様でした。二十九歳
と十一カ月で瑞應寺専門僧
堂に安居させて頂き、半年
後の昭和六十年四月に堂監
行、つまり檀崎通元老師の
行者になりました。最初に
叱られたのは転役の拜でお
部屋を訪ね「失礼致します」
と、合掌一礼した途端でした。
「何じゃ、その合掌は。お前は、
目の前の事も出来んで何が
出来る!!」。この厳しい叱咤
を皮切りに、開枕で床の準

備をして叱られる迄に、都

合三十六回お叱りを受けました。転役に当たって、その日まで堂監行を勤めていた宗孝さんが、「堂監老師はとも細かくて、一日三十回から四十回は叱られるから覚悟しておいた方が良いよ。」と言葉を掛けてくれたのですが、正にその通りでした。

言葉を発しては叱られ、お茶を入れては叱られ、歩いては叱られ、布団を敷いては叱られ、精神的に萎縮して仕舞い、言葉や動作が更にぎこちなくなりますが、また叱られる。そして、そのお叱りの度に、「お前は三十歳にもなって日本語もよう話せんのか!」「お前は三十にもなって、お茶一つ満足に出せんのか!」「二言目には「三十にもなって、三十にもなって」と、仰る。最初は「何でいちいち三十・三十と仰るのだろう!」と、正直に

言うとは少々不快でした。

しかし、よくよく思えば、自分の意思で修行道場を選び、自ら身を投じた筈の修行生活でしたが、無意識の中に先輩と歳を比べ、自らの経歴を思い起こしては優越感を抱いたり、その意識の中心に「俺は三十歳だ」との強烈な我愛・我執が有ったのです。三十歳までの人生、「夜間高校に通い苦学し、大学三年から都心のお寺で役僧をしながら学び、卒業後は曹洞宗教化センターで布教教化の研修をした」、この過程を自ら学んだ処世術〈素直・謙虚・真面目〉で過ごして来たのです。しかし、それは、〈受け入れて貰いたい〉、〈認めて貰いたい〉、〈良く思われたい〉、どれも皆、我愛・我執の現れでした。

さあ、此所で「胡説乱道」の出番です。通元老師のお叱りは、早くから世間に出

て、そこで自ら身に付けた

世に処する術を、これまで何時でも通用して来た術に潜んでいる我愛・我執を見据えた上で、それを木つ端微塵に碎いたのです。この事に気付くまでの私にとって、老師のお叱りは正に胡説乱道でした。これまで通じて来た事が通じず叱られるのですから、私にとつて老師のお叱りは無茶苦茶を仰る胡説乱道以外の何物でもありません。「お前は行者の役割を軽くみとるんか!」と言われて「とんでもありません」と答えますと、「とんでもない」と言うのはとんでもない時に使うんじゃない!大袈裟な言い方をするな!!」と、叱られる。浄髪の際、シツクの刃を取り替えようとするに、「勿体ない!未だ取り替えんでええ!」そこで、古くて切れない刃で剃り始めると「痛い!」「痛い!」と叱ら

れ、仕方なしにお湯をつけて指先で強く髪を揉んで柔

らかくしようとして、また「痛い!」胡説乱道でしょう?心の中で「だから刃を取り替えようとしたんでしょ!」と呟いておりました。後から振り返れば、老師は、「お前が良かれと思つてやつている事は皆世法じゃ、仏道じゃない」と、私の世法を乱道、木つ端微塵にして仏道へと導いて下さっていたのです。一光老師はよく「在家は髪を伸ばす、出家は髪を剃る。出家は在家の逆を行くんじゃない。」とお示しでしたが、「胡説乱道 九十七年」通元老師の御一代は、一見無茶苦茶を仰つておられる様に聞こえても、世法ではなく仏道の立場から真実を語られ、学仏道へと導いてくださっていたのです。

このあとの読みようは、老師がどのように読まれたか

は分かりませんが、私はこんな風に読ませて頂きました。

「行くに臨んで一著すれば如今安然」「行くに臨んで」の行くは、多分逝去するの「逝」逝くと同義ではないでしょうか。遺偈ですから、「さあ、儂の人生もそろそろ幕引きじゃ、逝くに臨んで一著するならば、〈如今安然〉今は縁起の儘にご縁に任せて安らかなもんじゃ。」と、仰つていのように思えてなりません。突然、縁起を引つ張り出したように聞こえたかも知れませんが、それには訳があります。

永平寺から二度目の就任となる布教部長での上山を打診されていた時でした。丁度、秋田県は満友寺さんの結制があり、通元老師は助化師・西堂でお越しでした。私もお声掛けを頂き法要解説でお邪魔しておりました。晋山式の前晩の宿で

のことです。行者時代には老師のお抱えマッサージ師のように日常よく按摩をしておりました。揉ませて頂いた最初の頃は「痛い!」「痛い!」と、よく叱られたのですが、慣れてこられてからは、「お前のこの痛いのが良くなった。来た。痛くないとやって貰った感じさんのよ。慣れとは怖いもなんじゃな」などと喜んで下さるようになったのです。そんな経緯から、この晩もお声が掛かり老師の按摩をさせて頂いておりました。按摩をしながら「老師、実は又永平寺からお声を掛けて頂いております。今度は老師も永平寺でお勤めになられた布教部長です。」と、申し上げると、「おお、ほうか、そりゃあ頑張ったらええ」こう仰いました。私は「はい」と返事をし、そこでまた余計なことを言って仕舞ったのです。「老師もお勤めになられ

たお役ですから、瑞應寺様に恥をかかせることのないように一生懸命勤めます」と。こう言った途端です。それまで「おお、気持ちええのー、ありがとう、ありがとう」と言われながらうつ伏せでおられた老師が、突然「ガバー」と起き上がって、「それがいいんのよ!!」と厳しいお顔になり、「それは計り事じゃ。瑞應寺さんに迷惑をかけん? その言葉の裏をよう考えてみー! お前の腹の中は、よし、見てろ。わしは、やってやるぞ! そんな計らい心が見て取れる。もつと自然体で縁に任せてやればええんじゃ。自然にいけばええ。仏教は縁起じゃからな。全てはご縁に任せて自然体でいかにやいかん。計り事はいかん!」そう仰って、またうつ伏せになられ、何事も無かったかのように按摩に戻りました。御老師の遺偈「如今安

然」と、あの時の「仏教は縁起じゃから計り事をするな、自然体で縁に任せて行けばええ。」とのお言葉が、私の中でピッタリと符合するので。御老師の「如今安然」はお言葉通りご縁に任せきり、頂いたご縁に誠実に尽くされ、安然と日々をお過ごしだったでしょう。ご自身の老いも、ご自身の死さえもご縁として頂き、自然体で受け入れておられる。正に、ご縁に任せた御一代が「如今安然」で完結しているのだと思います。老師に叱られ諭された教えを思い出しながら、私なりの「胡説乱道 九十七年 行くに臨んで一著すれば

◆ご先祖様のおかげです
私が瑞應寺で修行中に、葬儀が終わってすぐにお墓に納骨のお勤めがありました。
終わってから、老師様から「このお話は、笑い話としてサラッと聞き流してください」と言われましたが、私の心にグサツと突き刺さる忘れられないお話でした。
『今日お墓にお骨を納めました。』
「これからお仏壇参りはもちろんですが、お墓参りも、必ずお勤めして下さい。」
皆さんは、亡くなられると、先ず閻魔大王様の前に連れていかれます。そして閻魔帳と云う生前のあらゆる行いを記録した帳面を基に四十九日間かけて、これからの行き先を査定されるのです。
それは、亡き人のご遺族ご親族、ご縁のある皆様お一人お一人のお仏壇やお墓へお参りする供養、何よりも亡き人への感謝の心も、今日からその帳面に記録されていき、閻魔様の査定に響くのです。
いつもお参りしたいと思っても、雨の日も、風の日も、雪の日



日もあります。またご遠方の方ご仏壇のない方もいらつしやいます。そのような時にでも、お墓の方角に向かって、手を合わせて礼拝し、亡き人を偲んでいただくだけでも大丈夫です。必ずその心が通じて、間違いない閻魔帳に記録されていきます。その功德の積み重ねで亡き人はお釈迦様のお弟子様としてみ仏様の世界に落ち着かれるのです。
皆様の供養のお姿、お心が通じて「あつ今日もお参りに来てくれたな。手を合わせてくれたな」と感謝され、喜ばれます。そうお話をされました。
私は今でも忘れられないお話の一つです。
ご先祖様があるからこそ私の命です。
合掌とは、今生かされていることに感謝する心です。
食事の時にもご先祖様に感謝して「いただきます」「ごちそうさまでした」と手を合わせてお唱えするのも同じ心です。
ご先祖様のおかげで、お互いに幸せで平和な今を過ごさせていただいていると思いたいものです。
瑞應寺専門僧堂侍聖 山本 兼照
令和五年二月一日〜十日



■金毘羅初大祭

一月三十一日(火)(旧一月十日)
は当山鎮守金毘羅大権現初大祭。
午前十一時に村上堂長導師
のもと上殿して山門鎮静、修
道無難を祈願。



金毘羅初大祭

■涅槃摂心

二月六日(月)より五日間、
恒例涅槃摂心を修行。一山竜象
衆、釈尊報恩の只管打坐。会中
は門原後堂(東印請祖)、吉松維
那(正法眼蔵八大人覺)、金蔵司
(般若心経)と法を得る。供養点
心菓子等、会中の施主に深謝。
令和五年涅槃摂心 供養施主

当山 総代会 殿
当山 梅花講 殿
今治市 禅興寺 殿
愛知県 森川法雲 殿
愛知県 延命寺 殿
愛知県 宝泉寺 殿
広島県 少林寺 殿

■冬安居解制・涅槃会

釈尊入滅の聖日、涅槃会と併
せ冬安居が解制。首座菅原康稔
士以下一山諸兄弟、乳水の如く
和合し道業を一興した。

二月十四日(火)、土地堂念誦、
涅槃会速夜諷経。十五日(水)、
曉天、祝祷朝課、鎮守諷経に次
いで涅槃会献粥諷経、小参・人事
行礼、規範に準じ厳修。午時、門原
後堂のもと涅槃会正當諷経。



小参



涅槃会 正當諷経

二月の日鑑

一日 祝祷
六日 涅槃摂心(十日迄)
十四日 土地堂念誦
十五日 涅槃会速夜諷経
祝祷・小参・人事行礼

十五日 涅槃会献粥諷経
涅槃会正當諷経
略布薩
十八日 観音講・勉強会
廿八日 略布薩

三月の予定

一日 祝祷
七日 参玄会(九日迄)
十五日 祝祷
常楽会(おねはん)

十八日 略布薩
廿一日 観音講・勉強会
廿一日 萬霊塔(永代墓)供養
卅一日 略布薩



鐘声

もうすぐ瑞應寺に上山してか
ら丸二年が経つ。僧堂の行持に
も慣れてきたが、同時に怠け心
も表れるようになってきた。

また今年も新到和尚さんが
上山されるだろう。今一度氣
を引き締めて、新到和尚さん
に後ろ指を指されないよう、
見本となれるよう、一挙手一
投足氣をつけて修行に励んで
いこうと思う。 副堂 慧岳

瑞應寺専門僧堂

安居者募集

安居を希望される方には、掛塔志願書を
送付致しますので、左記にご連絡下さい。

愛媛県新居浜市山根町八一
電話(〇八九七)四一・六五六三
FAX(〇八九七)四〇・三一二七



僧堂内朝課